

光円寺報

2011年 10月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地384

後藤明照・由美子 (惟蓮)

TEL & fax 0790-26-0162

mail Kouenji_dayo@nifty.com

<http://Kouenji-hou.com/>

通信費年間 1000円



1000年
先に
いのちは
つづく

映画祝の島より

仏教徒宣言 (その九十三)

秋晴れの気持ちの良い天気が続く中、咲き遅れた彼岸花の鮮やかな赤色と、刈り取られた田・一面に細かく切り刻まれた稲藁の黄色が、青い空、白い雲とマッチして、秋の日のワンシーンのように美しい情景を織りなしています。

今、この日本中、何処でも当たり前のように見えることのできる風景を、「放射能汚染や被曝」で奪われてしまったたくさんの人たちがおられます。そんな中、「三・一一」から七ヶ月を過ぎてもなお、収束の時期も依然としてはつきりと示されず見通しが立たない、福島第一原発事故の現状が、重く私たちの生活の一部として圧しかかっています。

この七ヶ月の間、私たちは、テレビ・新聞を通してどんな情報に接して来たのでしょうか？ 事故当初のマスコミの報道を確認することには、今・そしてこれからの未来に対して、私たちのあり方・生き方の「確認」と「覚悟」になり、同時にそれは、未来に生きる全ての「いのち」に対する、私の責任を果たす事になるのではないのでしょうか。

現在もそうですが、ほとんど流れてくる情報は、政府・東京電力から発表されるものです。そして、当初はその情報に対して疑問を投げかける声がほとんどなく、同じ顔ぶれの「専門家」の意見の垂れ流しで、信頼するに足る情報でなかったことが後になってわかってきました。そのことに対して、情報を流した側(政府・東電・マスコミ)は、未だにその「間違いや、不適切な誤解を招く情報」だったことを訂正し、謝罪する事も無く、今もまた、様々な情報を発信し続けています。その一つが、事故収束に向けて、進んでいるように報道された「冷温停止」を年内に達成するという細野原発担当大臣の発言です。

これに対し、京都大学原子炉実験所小出裕章さんが言われていますが、「原子炉が正常に運転していた段階で、制御棒を入れて、原子炉の核分裂反応を止める。そして徐々に冷やしていったら100度以下にするという状態を私達は「冷温停止」と呼んできました。しかし、もう今の段階では原子炉の炉心自身がメルトダウンを始めてしまっている。圧力容器と

いう鋼鉄の入れ物自身が、もう底が抜けてしまっているというふうには、東京電力も政府も認めているわけですから、「冷温停止」なんいうテクニカルターム(専門用語)はすでに意味がありません」と。この指摘に政府はどう答えるのでしょうか。この他にも「原発は絶対に安全」「原発はクリーンエネルギー」と。この二つは今回の事故で放射能汚染されてしまった事で、間違いだったと明らかにになりました。そして「原発はCO2削減に効果がある」も嘘だった。この事は、事故前のコマージュャルで耳にしていたことですが、原料のウラン採掘から処理に至るまでの過程でたくさん化石燃料を使用している事実が明らかになっていきます。又、「原発は発電コストが低い」も嘘。核のごみ処理費用は入っていないかった上に、事故処理費・損害賠償に一体いくら費用がかかるのか、一企業では賄い切れない金額が圧しかかっています。「原発を止めると電力が不足する」これも嘘。先月も直接関電に聞きましたが、根拠となる数字は示されませんでした。元々、原発は急に止めないといけない事があるから、電力会社はその時に、まかなえるだけの他の余力の発電能力は保持しているそうです。

又、私たち自身にある「嘘、その嘘の崩壊、その誤魔化しのための更なる嘘」という生き方が見えてきました。これまでもここで何度も書いて来た事ですが、仏教は「世間虚仮」と教えます。世間の「世」とは「遷流」(せんる)の意味で移り変わることを、「破壊」の意味で壊れること、「覆真」(ふしん)の意味で真実を覆っていることあり「間」は「間隔」の意味で、個別に分けると。それは、私と真実との関係が常に変わり・壊れ・覆いつくされ、真実との関係が切り崩され、バラバラになってしまふ。だから虚・むなしく、仮・かりのものとしてしかないので「世間」だと言いついてます。そして「念仏のみぞまこと」続くのです。虚仮なる世間の中において私に「真実たれ」とはたらきかける。そのはたらしきを「南無阿弥陀仏」念仏というのです。だから念仏に促され、虚仮不実の世と虚仮不実の我が身が何時も「まこと」から問われ続けているのです。現在進行形で。

南無阿弥陀仏

釈明照

上映会のお知らせ 守るべきものを思い出す映画をぜひごらんください

ほうりのしま

祝の島

二〇一一年十月二十二日(土)

姫路市文化センター小ホール

上映時間 ①十三時半〜 ②十四時〜開場はいずれも三十分前 各回とも上映後瀨瀬あや監督のお話あり 前売 大人1000円 小中学生500円 当日 大人1300円 小中学生 700円
後援 姫路市・姫路市教育委員会 問合せ 映画「祝の島」上映実行委員会
TEL079-233-0034, 079-246-2134

祝の島について

二〇〇年前、沖で難破した船を助けたことから 農耕がもたらされ、子孫が栄え、現在に至るまでのちをつないできた小さな島がある。山口県上関町祝島。瀬戸内海に浮かぶこの島は、台風が直撃することも多く、岩だらけの土地には確保できる真水も 限られ、人が暮らしやすい環境とは決していえない。その中で人々は、海からもたらされる豊かな恵みに支えられ、岩山を開墾し、暮らしを営んできた。そして互いに助け合い、分かちあう共同体としての結びつきが育まれた。人間の営みが自然の循環の一部であることが、祝島でははっきりと見える。「海は私たちのいのち」と島の人は言う。1982年、島の対岸に原子力発電所の建設計画が持ち上がった。「海と山さえあれば生きていける。だからわしらの代で海は売れん」という祝島の人々は、以来二八年間反対を続けている。効率と利益を追い求める社会が生み出した原発。大きな時間の流れと共にある島の生活。原発予定地と祝島の集落は、海を挟んで向かい合っている。二〇〇年先の未来が今の暮らしの続きにあると思うとき、私たちは何を選ぶのか。いのちをつなぐ暮らし。祝島にはそのヒントがたくさん詰まっている。